



# 新境地J1への挑戦！ 地域に根差し、親しまれ、愛される「子龍」が 新たなフィールドを駆け上がる

**TP TOP INTERVIEW** 株式会社 フットボールクラブ水戸ホーリーホック  
代表取締役社長 こじま こう 小島 耕

2025年、J2でリーグ優勝を果たし、今期からJ1に挑戦中の株式会社フットボールクラブ水戸ホーリーホック（本社：茨城県水戸市）の小島耕社長に、これ

までの経緯、地域への貢献活動や人材育成の哲学、組織マネジメントや経営の工夫、地域スポーツクラブのあり方についてお聞きしました。

（聞き手：弊社社長 大森 範久）

## 苦難を乗り越えてJ2優勝・J1昇格。 地域への貢献は、競技を通じた感動・活力の提供と地域課題への取り組み。

J2リーグ優勝とJ1昇格、誠におめでとうございます。社長 ありがとうございます。経営者としてクラブを率いてから今年2026年で6年目、7月で一区切りを迎えます。振り返るといろいろなことがありましたが、鹿島と直接対戦する「明治安田J1百年構想リーグ地域リーグラウンドEAST 第9節」4月4日の観戦チケットは、発売からわずか1分で完売しました。私が学生の

頃にプロサッカーチーム「鹿島アントラーズ」が誕生しカシマスタジアムに随分通いましたが、自分が経営に携わるチームが、その鹿島と直接対戦する日が来るとは夢にも思いませんでした。当クラブの歴史の中でも象徴的な出来事の一つだと感じていますし、ここ茨城におけるサッカーの存在感や皆さまの期待の大きさをあらためて実感しています。



J2優勝時

写真提供：水戸ホーリーホック

小島社長が社長に就任されてから、これまでで一番のご苦労は何だったのでしょうか。

**社長** 社長の立場の重さと難しさを実感したのはやはりコロナ禍への対応でした。就任直後の約4か月間は試合を一切開催できませんでしたが、その間もクラブの運営には経費がかかります。この状況をどう乗り越えるかが、最初に突き付けられた大きな課題でした。

その後、ようやく試合の開催が認められるようになりましたが、「声出し応援の禁止」や「1席ずつ間隔を空ける」といった制限付きでした。私たちは感動を提供することを生業としており、スタジアムでの大きな声援や一体感こそが価値の源泉です。その魅力を自ら制限せざるを得ない状況は、とても歯がゆく、つらいことでした。

厳しい時期を乗り越えてつかみ取ったJ2リーグ優勝とJ1昇格と言えますね。

**社長** 当クラブのステークホルダーは株主さまだけにとどまりません。ご支援いただいているパートナー企業

各社さまをはじめ、地域の市町村やファン・サポーターの皆さまなど、姿かたちは見えにくくても、大きな力となる多くの「集合体」としての支援が存在します。そうした方々一人ひとりの思いを背負ってクラブを守り抜き、さらなる成長へとつなげていかなければならないと、常に肝に銘じています。

貴クラブでは「地域密着型クラブ」を掲げていますが、地域への貢献についてはどのようにお考えでしょうか。

**社長** 地域への貢献としましては、大きく2つの柱を考えています。

一つは、競技を通じて「感動」と「活力」を届けることです。スタジアムでの観戦体験はもちろん、日々の試合や選手たちのプレーそのものが地域の皆さまの楽しみとなり、明日へのエネルギーにつながるような存在でありたいと考えています。

もう一つは、地域が抱える課題への取り組みです。現在、私たちのホームタウン推進協議会\*に参加している市町村は18に広がり、推計で人口約125万人の圏域をカバーするまでになりました。そのエリアの中で、「触れる（関わる）」「見る（観戦・認知する）」「支える（応援・協力する）」という好循環を生み出していきたいと考えています。こうした活動を着実に積み重ねることで、クラブも地域も、ともに成長していければと願っています。

\* ホームタウン推進協議会：

水戸ホーリーホックのホームタウン活動を推進するための自治体等による協議体。2025年度より石岡市、筑西市、桜川市の3市が新たに加入し、18市町村が加盟している。



取材風景 左：大森 範久社長 右：小島 耕社長

## 地元企業や自治体との関係は、「共創」がキーワード。 組織と組織、人と人をつなぐハブ的な役割を果たす。

Jリーグにはホームタウン制度があり、地域との関連性が強いと伺っております。貴社の状況についてお聞かせください。

**社長** 山梨や山形のように県全域をホームタウンとしているクラブもありますが、市民クラブという形態でここまでエリアを拡張している例は全国的にも少なく、岡山と水戸の2クラブのみだと認識しています。その意味で、当クラブは非常に特徴のある存在だと捉えています。

ホームタウンとして関わることのできる自治体数には上限がある一方で、茨城には観光資源や優良企業が数多く存在しており、他の地域と胸を張って勝負できるポテンシャルがあると感じています。まだ十分な伸びしろがある一方で、首都圏と比較すると、どこか「あきらめ」に近い空気が漂う場面もあります。そんなときも、前向きな意識を醸成していくことがクラブに課せられた重要な役割だと考えています。

今後も地域との関連性を一層高めるとともに、クラブとして外部に向けて地域の魅力を積極的に発信し、茨城の価値向上に貢献していきたいと考えています。

地元企業や自治体との関係も強いと思いますが、この点についてはどのようにお考えでしょうか。

**社長** 地元企業や自治体との関係については、「共創」をキーワードにしたいと考えています。単にロゴの掲出や広告出稿といった形にとどまらず、企業の皆さまがお持ちの技術・人材・アイデアと、クラブの発信力や地域ネットワークを掛け合わせることで、新たなサービスやプロジェクトを生み出していきたいと考えています。

この共創の可能性は、教育・人材育成、健康、環境、産業振興、デジタルなど、さまざまなテーマに広がっています。自治体との関係においても、行政が担うべき

領域と、クラブだからこそ果たせる役割との最適な組み合わせを検討しながら、地域課題の解決にともに取り組んでいきたいと考えています。

地域への貢献において、柱の一つに地域課題への取り組みも掲げられていますが、どのような課題意識をお持ちでしょうか。

**社長** 環境問題をはじめ、人口減少や耕作放棄地、空き家の増加など、地域には多くの課題が山積しています。もちろん、私たちクラブだけでそれらをすべて解決できるわけではありませんが、課題を広く知っていただくきっかけづくりや、人と人、組織と組織をつなぐ「ハブ」のような役割は果たせると考えています。

現在、クラブを支えてくださっているパートナー企業は200社を超えています。この強力なネットワークを活かし、地域課題の解決スピードを少しでも速められるよう、クラブとしても主体的かつ積極的に取り組んでいきたいと考えています。



水戸ホーリーホックが展開する空き家相談窓口



ホームタウンと連携したPR大使企画 選手の担当市町村決めはドラフトにて決定



ホームタウン北茨城市で行ったサイン会



ホームタウン笠間市で行ったサイン会



ホームタウン那珂市で行ったサイン会

写真提供：水戸ホーリーホック

## 地域活性化と社会課題解決のアシストに注力。 「脱炭素チャレンジカップ」で「環境大臣賞グランプリ」を受賞。

地域課題への具体的な取り組み事例がございましたら、お聞かせください。

**社長** 現在、ソーラーシェアリングを活用したGXプロジェクトを推進しています。農地に設置したソーラーシステムで発電した電力を地域の道の駅へ売電するとともに、収穫した農作物についても可能な限り地産地消を図ることで、循環型の地域共生圏づくりに貢献しつつ、気候変動への対応にもつなげるプロジェクトです。

この取り組みは、「脱炭素チャレンジカップ」\*の企業・自治体部門において高く評価され、最高位にあたる「環境大臣賞グランプリ」を受賞しました。

全国規模のコンペで見事、環境大臣賞を受賞されたとのことですが、GXに取り組みられたきっかけは何だったのでしょうか。

**社長** きっかけは、2021年（令和3年）にさかのぼります。城里町にあるクラブハウス「アツマーレ」を通じて地元の皆さまと接する機会が増えるなかで、町内の農業人口の減少や耕作放棄地の拡大といった課題を伺いました。そこで、「クラブとして何ができるか」を考え、まずは耕作放棄地をお借りして農業に取り組み、収穫した農作物の販売収入を新たな収益の柱の一つとして育てていきたいと考えるようになりました。

こうした活動を進めるなかで、昨年本格的に稼働したのがソーラーシェアリング事業です。約2,000㎡の農地に地上約3mの高さで太陽光発電パネルを設置し、発電と農業を同時に行える環境を整えました。現在、この設備では毎時約90kWを発電し、「道の駅かつら」と「物産センター山桜」への売電を行っています。発電事業と農業を組み合わせることで、地域課題の解決と、クラブの新たな収益源づくりの両立を目指しています。

こうした地域課題への取り組みは、他のプロスポーツでも行われているのでしょうか。

**社長** このような取り組みは、プロ野球など他のスポーツではあまり見られない、プロサッカークラブならではの地域との関わり方だと考えています。サッカーは7～8月を除き、約11か月間シーズンが続き、その長い時間を地域とともに歩む存在です。その特性を生かし、私たちも社会課題に対して積極的にアクションを起こしていきたいと考えています。

また、これらの取り組みを通じた地域への啓発活動にも力を入れており、現在も連日、多くの方に現地へ視察にお越しいただいています。

\*脱炭素チャレンジカップ：CO<sub>2</sub>排出量実質ゼロ（脱炭素社会）の実現を目指し、学校・市民団体・企業・自治体などが地域で取り組む温暖化防止活動を表彰する全国大会。



脱炭素チャレンジカップ2026 環境大臣賞グランプリ



城里町にあるクラブハウス アツマーレ



圃場

GXプロジェクト落成式の様子  
写真提供：水戸ホーリーホック

貴クラブの活動は競技を通じた「感動」と「活力」に止まらず、地域との密接な関係性があるのですね。

**社長** 日本の国土のおよそ80～85%のエリアには、いずれかのクラブのホームタウンが存在しており、アウェイサポーターが全国各地へ足を運ぶ動きは「アウェイツーリズム」と呼ばれています。たとえば週末の朝、東京駅や羽田空港に行くと、色とりどりのJクラブのユニフォームに身を包んだサポーターたちが、全国各地へ応援に向かう光景を見ることができます。これは

一つのカルチャーとなっており、地方から首都圏へ応援に向かう動きも含めて、日本中を人々が行き交う文化が形成されていると言えます。

こうした文化を通じて、Jリーグは全国を少しでも明るく、そして元気にしていける存在だと考えています。私たち水戸も、その行き先として選ばれるクラブ、そして地域でありたいと願っていますし、この分野にはまだ大きな伸びしろがあると期待しています。



アウェイゲームにも多くのサポーターが足を運ぶ

## スポンサーは「パートナー」であり「ファミリー」。 仲間を増やすという原点を忘れず、地域とともに歩み続ける。

運営上、企業からの支援は大きな比率を占めると思いますが、最近のパートナー企業数の推移についてお聞かせください。

**社長** パートナー企業はここ数年で、約180社から260社へと非常に速いペースで増加しています。J2リーグ優勝直後もスポンサー料の値上げは行わず、「応援して下さる仲間を増やしていこう」という方針を貫いてきたことがその要因だと受け止めています。

水戸ホーリーホックは市民クラブですので、スポンサーの企業の皆さまを単なる支援者ではなく、「パートナー」であり「ファミリー」だと考えています。その仲間が着実に増えていることは、本当にありがたいことです。ご支援の「太さ」は時期によって変動しても構いませんので、企業の皆さまには「何よりも長く応援していただきたい」とお伝えしており、現在は特に「応援して下さる仲間を増やすフェーズ」にあると認識しています。

パートナー企業の増加で、どのような変化がありましたでしょうか。

**社長** パートナー企業の増加によって、クラブとしての社会的な信用が高まりました。多くの企業に関わって

いただくことで、「自分たちのクラブだ」と感じてくださる方が増え、その輪が着実に、シンプルに広がっていきます。そのための企業訪問や対話の機会には、私自身も積極的に足を運んできましたし、こうした取り組みが結果として勝つ確率を高めることにもつながると考えています。

わずか数社から始まった地域での取り組みが、少しずつ広がりを見せ、現在の260社という形へと育ってきました。これからも「仲間を増やす」という原点を忘れず、地域とともに歩み続けていきたいと考えています。



J1昇格後はスタジアムの来場者数も大幅な増加傾向に

写真提供：水戸ホーリーホック

## フロントと選手が一体で動く「育成型クラブ」。 人と環境が人材育成の核。

話題を変えまして、内部体制について伺いたします。まずは、選手とフロントとの関係についてお聞かせください。

**社長** 当クラブは、J1昇格を目指す育成型クラブとして、限られた資源の中でどう勝つかを常に模索してきました。サッカーは番狂わせが起こりやすい競技であり、工夫次第で勝利の可能性を高めることができます。売上規模が決して大きくない状況でも、少しでも勝率を上げるには資金の有効活用が必要です。そのためフロントは、収益をいかに伸ばしていくかを真剣に考え続けてきました。

そのプロセスの中で特に大切にしてきたのが、「選手とフロントの距離を近く保つこと」です。立場の隔たりをできるだけ小さくし、同じ目線でクラブの現状や目標を共有しながら、一体感を育んできました。約60クラブがひしめくJリーグで上位に食い込むためには、この一体感こそが欠かせない要素だと考えています。

**貴クラブは「最強の育成型クラブ」、「人材育成の水戸」と言われていますが、その背景についてお聞かせください。**

**社長** 人材育成において、大きく三つの柱を大切にしています。第一に「自律」、第二に「失敗を通じた成長」、第三に「人としての成長」です。

スポーツ界には、いまだ未整備な部分や旧態依然とした体質が残っており、「スポーツの仕事がしたい」という熱い思いでこの業界に飛び込んできた方が、理想との

ギャップに失望して辞めていく姿も少なくありません。そうした現実と向き合うたびに、この業界全体の価値をもっと高めていかなければならないと感じています。

**貴社の社員の方々も、大きな理想を掲げて入社されたのですね。**

**社長** 当クラブには、「水戸ホーリーホックで働くこと」に大義を感じる人材が集い、各自が自らの手法や規律に基づいて自律的に働ける環境を整えてきました。

Jリーグに所属する選手は全体で約2,000人いますが、能力の個人差はそれほど大きくありません。

しかし、選手のプレーは、出会いや環境といった「きっかけ」によって大きく変わります。当クラブは、ホームタウン活動がリーグの中でもトップクラスに充実しており、地域との関わりや社会活動を通じて、若い選手たちに多くの「きっかけ」を提供してきました。クラブとしての価値や方向性を明確に打ち出すことで、それに共感する選手やスタッフが集まり、相乗効果が生まれます。

特に、うまくいかないときこそ選手に「力を与える」ことを重視し、視野や考え方が広がるようなサポートを続けてきました。そうした積み重ねの結果として、優秀な人材が自然と集まりやすいクラブへと成長してきたのだと捉えています。突き詰めれば、「どのような人と接し、どのような環境に身を置くか」こそが人材育成の核であり、その違いが、選手のその後の伸びしるを大きく左右すると考えています。



FW 背番号10 渡邊 新太選手



MF 背番号3 大崎 航詩選手

写真提供：水戸ホーリーホック

## プロスポーツクラブは一般企業とは根本的に性格が異なる組織。 前向きでポジティブな環境づくりに注力し、地域とともに何事にも前向きに取り組む。

一般企業との相違について、どのようにお考えですか。

**社長** プロスポーツクラブは、一般企業とは根本的に性格が異なる組織です。資金的な余力があれば、株主への利益還元よりも、まずは選手への投資やチーム強化に充てるべきだと考えています。また、プロクラブである以上、ピッチ上での結果や選手への継続的な投資が求められるのは当然であり、その期待値は年々高まっていると感じています。

その中で私が特に意識してきたのが、「前向きでポジティブな環境づくり」です。選手やスタッフがそれぞれの力を最大限に発揮できるような環境の整備こそ、クラブの最も重要な役割だと考えています。こうした環境づくりを地道に積み重ねてきた結果が、少しずつ成果や結果となって表れてきているのではないかと感じています。

クラブに対し求められている成果は何でしょうか？

**社長** この地域でクラブに求められている成果は何かと考えたとき、私たちの最大の「売り」は、何よりも「感動や興奮」です。その価値をどう生み出し、どう地域の皆さまに届けていくかを、常に考え続けなければなりません。

そのためには、私自身がピュアな気持ちでサッカーやクラブと向き合い続けることが不可欠だと感じています。「このスポーツなしでは生きていけない」と思えるような状況を、これからもこの地域で生み出し続けたいと考えています。

日々の経営において、どのような点に留意されているかお聞かせください。

**社長** 私は、自分をクラブの「広報」であり「プレーヤー」でもであると捉え、外に向けて積極的に発信しながら、自らも先頭に立って行動するスタイルを貫いています。テクノロジーの進化スピードはますます加速しており、当クラブにも優秀な人材が数多く在籍しています。その力を最大限に活かし、前向きに新たな挑戦を続けていく姿勢を持ち続けなければならないと感じています。クラブとしても、経営者としても、変化を恐れることなく、次の世代へとつながる土台づくりを着実に進めていきたいと考えています。

最後に読者の皆さまに向けてコメントをお願いいたします。

**社長** 茨城県内にはクラブのホームタウンエリアである県北・県央地域をはじめ、課題を抱えるエリアがあることも承知しています。過疎化という問題に対して、人口そのものを大きく増やすことは簡単ではありませんが、「交流人口」を増やし、地域の魅力を知っていただくお手伝いなら、私たちにもできます。Jリーグの試合は年間で約20試合開催され、そのたびに8,000～9,000人規模の来場者がスタジアムに集まります。スタジアム観戦とあわせて茨城を楽しんでいただくことは、地域の魅力を発信するうえで、これ以上ないチャンスだと感じています。

こうした取り組みを積み重ねてきた結果、現在のホームタウン15市町村では、地域が自然と活性化していく仕組みが、ある程度かたちになってきました。交流人口も着実に増加していると実感しています。

地域密着型クラブとして、これからも何事にも前向きに取り組んでまいりますので、今後とも変わらぬご支援・ご声援のほど、よろしくお願い申し上げます！



育成年代も活躍している（写真はユースチーム選手たち）



地域の子どもたち向けにサッカースクールも行う

写真提供：水戸ホーリーホック



毎試合、一丸となって選手たちは戦う



スタジアムでは応援に駆け付けたサポーターで青一色に

明治安田 J1百年構想リーグ

水戸ホーリーホック ホームゲーム情報

5 (土) 14:00 K.O. 浦和レッズ

5.16 (土) 14:00 K.O. 東京ヴェルディ

5.24 (日) 14:00 K.O. 川崎フロンターレ

背番号 5 DF 井上 聖也

ケーズデンキスタジアム水戸

5月の水戸ホーリーホックホームゲーム情報

明治安田 J1百年構想リーグ

水戸ホーリーホック ホームゲーム情報

6.6 (土) 15:00 K.O. 対戦相手未定

プレーオフラウンド 2回戦

<J1百年構想リーグ プレーオフラウンド>  
東西に分かれて行われた地域リーグラウンドの結果から、両グループの同順位同士が対戦するホーム&アウェイ方式の順位決定戦になります。

背番号 6 DF 飯田 真敬

ケーズデンキスタジアム水戸

6月の水戸ホーリーホックホームゲーム情報

**COMPANY PROFILE** 株式会社 フットボールクラブ水戸ホーリーホック

会社沿革

- 1994年(平成 6年) サッカークラブFC水戸として茨城県サッカー協会に登録
- 1997年(平成 9年) プリマハムFC土浦と合併、株式会社 フットボールクラブ水戸ホーリーホックを設立。チーム名を水戸ホーリーホックと改称。第6回JFL参加
- 1999年(平成11年) 第1回日本フットボールリーグ3位
- 2000年(平成12年) Jリーグ入会、Jリーグディビジョン2参加
- 2025年(令和 7年) J2リーグ優勝。J1昇格が決定

会社概要

株式会社 フットボールクラブ水戸ホーリーホック  
 代表取締役社長 小島 耕  
 クラブ所在地 〒310-0015 茨城県水戸市宮町1丁目7-44  
 COMBOX310 1階  
 TEL 029-212-7700  
 URL <https://www.mito-hollyhock.net>  
 設立 1994年(平成6年)  
 ホームタウン 水戸市、ひたちなか市、笠間市、那珂市、小美玉市、茨城町、大洗町、城里町、東海村、日立市、常陸太田市、北茨城市、常陸大宮市、高萩市、大子町



クラブエンブレム

クラブカラー 青  
 クラブ名の由来 ホーリーホックは英語で「葵」を意味し、徳川御三家の一つである水戸藩の家紋(葵)から引用したもの。誰からも愛され親しまれ、そして強固な意志を持ったチームになることを目標にしている。